令和元年度 月刊 校長通信６号

（生徒・保護者版）Ｒ1.9.30（９月号）

俊英NOW

● 本校ゴルフ部に日本高等学校ゴルフ連盟からゴルフ用品贈呈

高校ゴルフ部の全国組織「日本高等学校ゴルフ連盟」の理事長井上尚彦氏が大阪から来校し、本校の加盟を歓迎して多数のゴルフ用品の寄贈をしてくれました。部長の中井君、顧問の永泉先生とともにありがたく頂戴しました。俊英高校は、佐久長聖高、松商学園高に続いて、蓼科高とともに加盟しました。これで本県の加盟校は、４校となりました。

校長ESSAY

あきらめないで続ければ・・・・・

やや自慢話めいて気が引けるのですが、いよいよ話題に窮(きゅう)して私事を書かせてもらうことにしました。はるかな昔の大学時代、いよいよ卒業論文を書かねばならなくなった頃の事、私は当時、文学部史学科東洋史学専攻生で、当時たまたまアンドレ・マルロー（1901－76）というフランスの作家の『人間の条件』という小説を読んでいました。この小説は、1927 年 3 月に上海で起こった革命暴動をめぐる人間群像を描くものでなかなかの傑作です。感動した私は、これをきっかけに卒論のテーマを 1927 年の上海革命としました。やっつけで書き上げた卒論は、**「1927 年上海労働者政権と4･12クーデター」**というものです。はっきり言って読むに耐えない代物ですが、何を勘違いしたのか、これを全面的に書き直して『歴史学研究』に投稿すれば採用されるのではなかろうかと思ってしまったのが、平成 5 年（1993 年）のことです。『歴史学研究』は、歴史学の世界では最も権威のある学術誌の一つで、一般の投稿も受け付けているとはいえ、まさに身の程知らずの極み、これが間違いの始まりでした。

私は、国立国会図書館や東洋文庫などを巡り、主に『申報(しんぽう)』という当時上海で発行されていた日刊新聞を史料に、3 年がかりで論文を書上げました。これが**「国民革命期の上海権力機構と中国の国家権威」**（1996 年）という論文です。満を持して平成 8 年（1996 年）『歴史学研究』に投稿したのですが、数ヶ月後に届いた結果は残念ながら「書き直し」でした。3 年かけたものがダメになるというのはがっくりくるものです。1 ヶ月ほど鬱々(うつうつ)したものの何とか気を取り直し、再挑戦することにしました。この後のことは、詳しく書いていくとイライラしてくるのでやめにしますが、結局初回も含めて 3 回投稿してその都度「書き直し」を指示され、ついに平成 12 年（2000 年）4 回目の投稿で情け容赦ない「不採用」が決定します。

結局、8 年間も入れあげて、手元には報われない論文が残りました。これではいくら何でも自分が可哀想だと思い、ツテをたどって信州大学人文学部の雑誌『信大史学』に投稿して

みました。ＯＢでもない自分に門戸を開いてくれた信大には、本当に感謝しています。ただし字数制限の関係で論点を削って内容をコンパクトにしました。この論文は、平成 12 年に『信大史学第 25 号』に掲載してもらうことができました。これが第一論文の**「国民革命期における上海の権力機構―中国の国家権威をめぐって―」**(『信大史学第 25 号』(信大史学会、2000 年)所収）です。しかし諦めきれず、元の論文の残った論点をさらに深めて新しい論文を書きました。そして平成 13 年（2001 年）、性懲りもなく『歴史学研究』に５回目の投稿をします。これは一発で「不採用」になりました。やけになって同じものを国立国会図書館東洋文庫の学術誌『東洋学報』へ６回目の投稿し、ここでも「不採用」となりました。よせばいいのに『近きに在りて』という中国近現代史の大学者、野沢豊氏の個人編集雑誌にも７回目の投稿、ここではまったくの無視でした。

自分がここまでこだわったのは、ここまでの過程で何人かの研究者（信大の後藤延子先生や久保亨先生、学芸大の田中比呂志先生、下関市立大の金子肇先生）との知遇を得ることができ、彼らからそれなりの評価を得ていたからです。『歴史評論』は、彼らとの交流の中で紹介された学術誌です。自分としてもこれが最後という覚悟で入念な手直しの末、８回目の投稿をしました。しかし、結果は残念ながら「書き直し」でした。その際のアドバイスとして、基本史料として上海日刊新聞『申報』だけでは不十分、上海の中国国民党機関紙『上海日報』も利用すべし、とのこと・・・・。

ついに、ここで力尽きました。いまさら『上海日報』を探し出す気力が湧きませんでした。もう諦めよう、しかし、どこかの大学の紀要ぐらいに載せてもらうことはできないだろうか。そこで大学の同級生で、大阪教育大の教授をしている友人（専門は中国古代史）に相談しました。彼が言うには、「『歴史評論』の「書き直し」は滅多にあることじゃない。せっかくのチャンスなんだから、あきらめず頑張ってみろよ。」とのこと。そこで気を取り直してリサーチすると『上海日報』は、東京大学の東洋文化研究所に縮刷版が所蔵されていることが分かりました。ＯＢでもない自分に門戸を開いてくれた東大には、本当に感謝しています。こうして、さらに一年かけて書き直し、平成 15 年（2003 年）、９度目の投稿をします。ところが、結果は再び「書き直し」。しかし、今回の「書き直し」は、採用を前提にした具体的な書き直し指示があり、かなり脈があると思われました。十数年の中で初めての手ごたえでした。指摘された部分を１ヶ月かけて書き直し、ついに 10 回目となる投稿をしました。結果通知は、平成 16 年（2004 年）の８月に来ます。恥ずかしながら、封筒を開ける手が震えました。通知書に「採用」の文字がありました。十数年、思い描いてきた瞬間でした。

一年後、ようやく『歴史評論』が発行されました。これが第二論文の**「国民革命期『上海臨時市政府』の成立とその実態」**（『歴史評論 663 号』(校倉書房、2005 年)所収)です。

つくづく思うのですが、こんなことになると分かっていれば絶対こんな苦労に手を染めはしませんでした。しかし、手を染めなければ、『歴史評論』の掲載はあり得ません。もしかしたら先が見えないということは、人生にとって大切なことなのかもしれません。